



ウクライナ情勢の動向と今後の行方

世界に大きな衝撃を与えたロシアによるウクライナ侵攻は、解決の糸口が見えず長期戦の様相を呈している。国際政治、旧ソ連地域研究を専門としている廣瀬陽子氏が、ウクライナ情勢、世界の秩序と趨勢について語った。



講師：廣瀬 陽子 氏

慶應義塾大学
総合政策学部 教授

ウクライナ危機でのハイブリッドな 作戦はロシアの既定路線

ロシアの外交の根幹をなすのは「勢力圏」という考え方で、第一義的には旧ソ連諸国、第二義的には旧共産圏と新領域を指す。外交においては、米国の一極的支配に対して多極的支配を展開することがロシアの重要目標だが、その維持のために欧州連合(EU)、そして特に北大西洋条約機構(NATO)の拡大は許せないことなのである。ウクライナは歴史の共有、民族的近接性、ロシアにとっての緩衝地帯という点で重要な意味を持つ。

そういう中、ロシアはハイブリッド戦争を多用してきた。ハイブリッド戦争とは、政治的目的を達成するために軍事的脅迫とそれ以外の手段を組み合わせ、非正規戦と正規戦を合わせて展開する戦争手法のことである。政治、経済、外交、サイバー攻撃、プロパガンダを含む情報・心理戦などのほか、テロや犯罪行為も含まれる。

ハイブリッド戦争は2014年のクリミア併合・ウクライナ東部の危機勃発で注目されるようになったが、新しいものではなく、旧ソ連諸国をつなぎ留めるためにハイブリッド的な手法をずっ

と用いてきた。ロシアは2014年12月25日に新軍事ドクトリンに署名したが、草案は2013年4月に提出されており、ウクライナでのハイブリッド的作戦は既定路線だったことは明らかだ。

低コストのハイブリッド戦争は 軍事予算の少ないロシアにメリット

軍事予算が米国の8%程度のロシアにとって、ハイブリッド戦争は民間軍事会社(PMC)の利用やサイバー攻撃、プロパガンダ作戦により安価に行えるメリットがある。ロシアのサイバー攻撃は侵入からサーバーダウンまで世界最速の高いスキルを持つものだ。

ハイブリッド戦争は日本にとっても脅威となる。ロシアは日本を国家ではなく米国の一部と考えており、日本がウクライナと同じように攻撃される可能性も認識する必要がある。日本はサイバー攻撃や情報リテラシーに対して非常に脆弱であり、日米同盟をはじめ国際協調が必要になるだろう。

新たな国際協調が今後の 新しい世界秩序づくりにとって重要

ロシアにとってウクライナ侵攻は何のメリットもないもので、論理的には説明できない。プーチン大統領の被害妄想、勝手な歴史観、高いプライド意識を傷つけられた欧米への意趣返しな

どが原因だったと捉えるしかない。

ロシアの要求はウクライナの非武装化と中立化という、決して両立し得ないことに加え、クリミアへのロシアの主権を認めること、ウクライナ東部2州の独立を認めることだ。

ロシアは間違った認識で見切り発車し、間違った情報によって戦略的過ちを繰り返している。ロシア軍の士気は低く、逆にウクライナの士気は高く、国民にも統一感がある。ロシアは多くの制裁を受けており、軍事的に勝利してもロシアの勝利はないだろう。ウクライナには海外からの支援も厚い。ウクライナは絶対に後に引けないが、戦争が長引くほど復興問題も重い課題となるだろう。

米国はロシアを弱体化させたいが、ロシアの混乱は望んでいない。欧州は各国の思惑が入り乱れ、一枚岩になっていない。中国はロシアにコミットすれば自分たちも制裁対象になる可能性もあるため積極的に支援しないが、ロシアを見捨てることもできない。今後はレベルを下げた付き合いを見せる可能性もある。

今後の新しい世界秩序は、米国の一人勝ちという説と、専制国家VS. 民主主義・自由主義国家に二極化するという説もある。インドなどのグレーゾーンの国もあり、世界の分極化の展開は重要なポイントになるだろう。他方、ウクライナへの支援で見えてきた、史上類を見ない新たな国際協調の行方は、今後の新しい秩序づくりにとって重要になるだろう。

